

## 華 府 (三)

九月に入ってからワシントンの中は九十度を越える暑さで閉口しているが、室内はエヤコンディションといって、しょっちゅう空気を入替えているので涼しくなっている。どの役所やオフィスに行っても、一室にせいぜい二、三人の人がゆっくりと整然と執務している状況は羨ましいと思う。更に羨ましいと思うのはみんな大変親切なことで、例えばアメリカの陸海空三軍と国防省が入っているペンタゴン・ビルディングのように三万人もの人がいるところでは、部屋を捜し当てるのが一苦労だが、道を聞けば、態々ついてきて教えてくれるし、紹介の労を頼んでも面倒がらずやってくれて、時間と場所をハッキリときめて、行く道筋や部屋の番号、電話の番号まで教えてくれる。それは彼等が特に努めてやっているというよりは、一般の空気がそのように出来上っていて、極めて当りまえのことを自然にやっているに過ぎないように見える。

昨日も私が農林省に行っていると、在外事務所から電話があつて、池田大蔵大臣からの伝言で、一時半と二時の間にサンフランシスコのホブキンスホテルに電話せよとのことだったので、

まごまごしていると、傍らにいたオテイガーというスペイン系の農林省の役人が、態々電話番号を捜し、そのホテルを呼び出して、大臣が電話口に出られるまで自分で世話をやいてくれた。「各国から大勢の人が来て一々こんなことまで世話をされることは大変でしょうね」と言うと、彼は平気な顔で「いやしょっちゅうやっていることです。私の役所に限らず、どの役所でも国際的な仕事が多いのです。穀物や綿花の品種の改良でも、ここで発見したものは各国に送ってあげています。どの局も世界の農業の進歩ということを主眼にしています。この間もお国の専売社の大熊君が来て、このピースをいただきましたが、どうも香りが不足しているようで、ウアジニヤの葉やトルコの葉をもっと混ぜなければいけないと申しておきました。そういう世界的な原料の割当というような仕事は、ワシントンに国際的な機関があつて、四、五十の人が働いています。いわば世界政府が部分的に出来上っているようなものです」と言う。「してみるとさしずめワシントンは世界の首都のようなものですね」と念を押せば、彼は笑いながら「そうです」と言う。そこへ色の黒い大きい男が入って来て何か判らない言葉でオテイガー君と話をしているかと思うと、躡かかてその男を私に紹介して「この方は南米のペルー人で農林省の技師です。私はスペインが郷里ですから、どうしてもスペイン語の方が懐かしいので

つい失礼しました」と言いながら、その男を何でも官房の人事課長に電話で紹介してやってきたようだ。そこへ、ノンネクイの六尺豊かな色の白い青年がやって来て、家畜のことでしきりに話合っていたが、英語がやや不自由に見えるので、「何処から来ましたか」と尋ねますと、「この人はフランスの畜産局の人です。家畜の勉強に来ているのです」と言う。そして、「家畜の飼育にはこういう本をお勧めしますが、あいにく手元にありません。本屋に行つて買つて下さい。」と言いつつ、地図を広げて道筋を教えて、「三時半にもう一度ここに来て下さい」と言つてかえっていた。総てがよどみなく淡々としている。

アメリカ人はこの第二次世界戦争を経験してから急速に成長し、國際的訓練が出来て大きく伸びたあと痛感した。そして世界の指導的な国家であり国民であるという自覚が、自然に身についてきているのだと思つた。こういう親切な行いというものは、いろいろ考えて見ると、結局、正直なところから萌えるものであると思う。人の言うことの裏を考えて見たり、人を疑うということになると、なかなかその相手の人に親切になれるものではない。私はこうして何人かの人に会つていろいろのことを聞いたり、資料をもらつたりしているが、何れの人もこちらの質問を一生懸命に聞いて、そのテーマを廻つて、できるだけ具体的に説明してくれ、具体

的な資料を捜してくれる。「こちらでもこの辺で切上げようと思つて話題を転換しようとする」「ちよつと待つて下さい。貴方の理解を助けるためにいい資料があります」と言つて自分の書棚のファイルを持つて来たり、場合によっては、附設の図書館や統計課に連れて行つて資料を見せてくれたりする。つまり、その問題が案外つまらない問題であつても、相手の言うことを額面通りとり上げて真正面から取組む真実さを持ち合せている。

これらはすべて、「衣食足りて礼節を知る」類いで、どの国民だつてアメリカのような豊かな余裕のある国に育てば、皆そうなるかと一応は考えられる。私などもアメリカ人の生活は、非常に裕福で豊富なものと考えこんでいた一人だ。しかしこちらで注意深く観察してみると、なかなかそうではない。早い話が洋服や靴を見ても、なるほど東京で見るものよりはいいと思つが、古い靴はともかくとしても、昔の兵隊靴のような裏がすりへつていゝものも平気ではいていゝし、洋服も特にいいものだなあと思えないで、下町にあるレデーメイドの三十ドル前後のものを着ているのが多い。特に食生活の面ではわれわれが大いにもつて範となければならぬところがある。先月の二十九日の夜と三十一日の夜は、それぞれ連邦教育局の課長に自宅で御馳走になつたが、何れも一品料理とコーヒ―とお菓子で、あとは冷たい水を呑んで湯を医し

つつ心ゆくまで話を楽しんだり、レコードに興じたりするやり方だ。日本のように数品の料理と酒を振舞って、終には泥酔にいたるといふのとはちよいと趣が違ふ。尤も最初の晩は訪問早々白い葡萄酒を出されたが、三十一日の夜は到頭ドライだった。つまり虚飾とかはつたりとか無理をしないで、自然に人生を楽しむというやり方の方だ。国力が内外に伸長しようとする国の国民生活は、われわれの考えるように決して安易なものではないという鉄則に対して、このアメリカも決して例外ではないように思われる。

無論アメリカの役人の給料は、われわれとは比較にならぬ程高い。最低の事務員タイピスト級が年収二千五百ドルというから、日本では月収七万円を超える勤定になる。尤もこの待遇に対して民間（民間でもいろいろあつてはつきりつかみかねるが最低月収百一、三十ドルの所も相当あるようだ）では出し過ぎるといふ非難があるが、ともかく相当なものに違いない。私が御馳走になつた連邦教育局の課長級で年収七千ドルないし八千ドルという。併し彼が住まつてゐるアパートの家賃は三部屋で月百五十ドル（五万四千元）というから、月収の二割五分程度は家賃に食われるし、税金も国と州の両方からとられる始末で決して楽ではないと言つていた。ちよつとバスや電車に乗つても、十セントないし十五セントとられるから、日本の三十六円ないし五十四円という勤定になるし、散髪（洗髪、ヒゲ剃を含まない）で最低一ドル（三百六十

円（靴磨きが十五セント（五十四円）という始末なのだ。日本のように、エンゲル指数が五割も占めるべらぼうな状態とは違うものの、非常に余裕があるものではないようだ。それに今度は膨大な国防費支弁のため百六十億ドル（五兆七千六百億円）の増税を敢行するというのだから、アメリカ市民の生活も、逐次弾力を失ってくるかと予想される。

## 華 府 (四)

華府滞在中、去る八月十四日以来、既に四十日にもなり、いよいよ明二十六日早朝から旅行に出ることにした。

華府の秋はちょうど北京の秋と似通うところがある。空はあくまでも広くかつ青く、空気はいよいよ清澄で風はいたって和やかである。雨は少く時に降ることがあっても柔和な細かい雨である。和辻さんの『風土』という本には、世界の風土圏を沙漠とか牧場とかモンsoon地帯とかに分けて各々その特色を鮮明にえがいてあるが、この地はまさしく牧場地帯に属し、自然が柔順で人間の営為を邪魔することは少いところだといえよう。到る処にある公園や緑地には奇

麗な芝生が植えてあつて、黒人の掃除夫が毎日たんねんに手入れをしている。その上に鳩やリスや雀が三々五々戯れているが、この鳩やリスは少しも人間を警戒することがない。鳩は豆をもった通行人の肩や掌にとまるし、リスが足元まで跳んで来て前足をあげて食物を待つている風景は平和なほほえましいものだ。街路は広い舗道になつていて、その両側には豪壮な建物が行儀よく並んでいる。通行人は少く雑踏している場面を見たことがない。ただ九月三日の労働記念日に労働者相手の家庭用品の廉価売出しがあつたが、主婦の行列を見たのはその朝だけであつた。不思議にも公衆便所というものが無い。それは自動車を利用する人が多いせいである。また紙くずや吸殻の少いのはアメリカ人得意の公衆道德の水準が高いことを物語るものである。そういう明るい美しい街だが、どうしたのかこの街は単調でこまやかな潤いというものが乏しい。日本の街が肉筆の字にたとえられると、この街は正に活字にたとえられよう。

概してアメリカの文化はこの首都の相貌が象徴しているように、能率と衛生という二つの筋金で貫かれていて、いわゆる「こく」とか「さび」というような屬性に乏しい。美術館に入つてみても米人の作品は数える程しかないし、どの名所を歩いてみても十八世紀以前のものは殆ど見当らない。歴史の浅いところであるから止むを得ないとは思つが、何となく寂しく感じら

れる。そこで、アメリカ人は建国の歴史はそのまま立派に保存してゆこうとする心がけをみながらもっているようだ。大統領の住むホワイトハウスは、目下修理中だが、それがいかにも狭いので拡張しようとする、全国の津々浦々から原形のまま保存してもらいたいという投書が何万と来たので拡張を思い止まったということである。この国にこうした保守的な機運が漸次濃厚になって来ていることは見逃せないことだと思つ。

序でにアメリカの能率の問題を少し考えてみたい。華府と桑港との間の電話連絡が十分も経たないうちにとれる。網の目のように張り廻された国内航空路は、大陸が占有する空間を著しく狭くした。切符や煙草を買うのが自動販売機によるのはよいとしても、生命保険に加入することもこの機械で無造作に出来る。バスや電車には車掌がいなくてもちゃんとことが足りるし、改札夫がいなくても十セント玉を入れると自動的に開札されて地下鉄に乗れる。すべてがいかにも便利であり能率的である。しかし、これはあくまでも施設の面における能率の具体化したもので、労働力の不足を補つものであるが、私はアメリカ人の精神生活自体にも能率的な社会生活を支える素地があるように思われる。

それは彼等の個人的に淡泊でフランクなことと、他人と協力したり協同したりする社会的精



神に恵まれていることである。彼等は東洋人のように廻りくどくない。本当は帰ってもらいたい客に対しても「まあごゆっくり」と言つてひきとめる。欲しくもない御馳走を無理に勧めてみたりする。昼食の用意がないのに、昼食を是非御一緒にという具合に勧める。われわれの生活は凡てがかように廻りくどくて厄介だ。彼等はそのようなことをしない。至つて淡泊であつて、物事をサツサと片付けていく。流れるように始末をしていく。ジメジメした心理の滯滞といふところがない。それは他人の言つたことをそのまま受け容れること、つまり他人の人格を認めることを意味するし、同時に自分の言つたことに責任をもつことを意味する。そこから協力的といふ齒車が動くのである。

どこの役所に行つてみても、或はアメリカ人と会つて話してみても、われわれはよくコーデイナーション（協同）とかコーポレーション（協力）とかいふ言葉をよく耳にする。日本ではそれが儀礼的臭味をもっているが、こちらでは極めて当り前のこと自然のことのように響く。およそ協同とか協力的かといふことは、他人の人格とか責任とかを素直に認めた上でなければできないことである。十八世紀の末、東海岸の十三州が各州の利害の尖鋭な対立を克服して今日の合衆国を築き上げたことは、もちろん独立戦争に三軍を指揮した平凡な市民ジョージ・ワシ

ントンの卓越した指導的人格に負うところが多いといわれているが、この協同の大精神がアメリカの歴史に息吹いていたからこそであると思われる。

今日世界史はかつてない深刻な危機に見舞われている。この危機に臨んでアメリカはスターリンのような偉大な指導者にも恵まれていないし、ヒトラーやムッソリーニのような天才を持っているわけではないが、アメリカ人のこの平凡な市民的大精神はその実践の場面を世界に拡大して、自由国家群と協力して仮想敵国を打倒し、平和と自由とを護持しようとする懸命の努力を続けている。そしてその努力の反映が、この首都華府をして世界首都的をますます濃厚にしている。

神の国は近きにある

僅かに眼を挙げれば正にこの処に在り

この処と天国とを劃る

一線もなく一土も無きなり。

とはミラーのカリフォルニアクリスマススの一句であるが、アメリカ人はこうした楽天的天縱の意気をもって、簡素な生活と粗野な精神をもって、嘗々たる工夫と実践を続けている若い国民であるといえよう。